令和5年度新学期がスタートして早1か月が過ぎようとしています。新しいクラス、新しい先生、新しい環境の中で誰しも緊張や不安が入り混じった本来の姿ではない子どもたちの様子がみられました。そろそろ、自分・・・というスタイルを出しながら必死に環境に慣れようとしている入学生たち。私が紀北支援学校の１日の中で一番ほっこりするのは昼休みです。小学部から高等部の児童生徒がグラウンドで笑顔いっぱい体を動かして遊ぶ姿を見るのが大好きです。緊張や不安から一気に解放された自由な時間を、上手く活用できています。そして、そこには先生達も笑顔で一緒になって時間を共有できていることです。オン・オフの切り替が大切なこのストレス社会の中、自由な時間をどう過ごしていいかわからない子どもたちも増えてきています。

紀北支援の児童、生徒のみんなが、この小さなグラウンドで譲り合いながら過ごす時間を私は、いつまでも大切にしたいと思います。

さあ・・・いよいよゴールデンウイークが明けて本格的な始動開始です。これからも、紀北のタイムリーな情報をお伝えします。是非、ホームページをご覧ください。

特別支援教育は、教育の原点～専門性とは～

教員をやっている姉妹の関係で、25 歳のとき自分は特別支援学校で働くことになる。教員になりたかった訳ではないがとりあえず親に教員になるといえば安心するかもと思っただけ。

教員になって、先ずわかったことがある。

自分が初めて担当した子どものお母さんから、抱き方を教わった。「特別支援学校は、はじめてで何もわかりませんが、保護者の方や周囲の先生方に教わりながら頑張りたいと思います」とよく言う定番の挨拶がある。「パン屋は、初めてで何もわかりませんが、お客さんに教えてもらいながらやって行きたいと思います」とパン屋さんは絶対に言わない。専門性とは、いったいどこまでをいうのだろう・・・

周囲の先生に疑問を投げかけても専門的にそれに答えてくれる人がいなかった。2 年目になり支援方法（環境）について学んだ。教員になろうと思っていなかった自分が、まさかこれほどこの特別支援教育の仕事にハマることになろうとは・・・そこには、子どもたちの輝きと成長が見えたから。　（特別支援教育・コラムより１部抜粋）

コラムからも感じ取れる特別支援教育は、何が教育の原点なのか意味、意図をいま一度我々教員は認識をしなければなりません。周囲の方々は学校に務める者はすべて、若手教員からベテラン教員まで専門家だと思ってくれています。元気でいきいきとした子どもたちの背景には、教員の姿があります。保護者の方から、そして社会から信頼してもらえる学校づくりを目指す中で「紀北支援学校」の教育について多くを語れる時間（時）と取組が必要です。4 月からは、挨拶ができる人になろうという学校あげての取組は、なぜ挨拶が必要なのかという意図や目的を子どもたちも、教員もしっかり話し合い取組を進めてまいります。　（校長・柏木）

高等部生徒会の
挨拶運動の様子